[ＮＩＲＥ＆エルムアカデミーの3泊4日合同キャンプ・ボランティアレポート]

笑顔をつくりたい、増やしたいと願う気持ちを忘れない

教育サポートセンターＮＩＲＥは、このごろテレビや新聞でもとりあげられている発達障害の子どもたちを多方面で支援しているＮＰＯ法人。
今回はＮＩＲＥと学習塾エルムアカデミーの３泊４日合同キャンプに藤井ゆずさんが参加してきた。

〝地域に根差した学びの場〟

東急大井町線荏原町駅で降りると、そこには小さな商店街が続いていた。いわゆる町の自転車屋さん、たい焼き屋さん、酒屋さん。学習塾エルムアカデミー、そしてＮＰＯ法人教育サポートセンターＮＩＲＥの教室は、そんな商店街の一角のビルの中にある。

学習塾エルムアカデミーは、「地域に根ざした学びの場」として創設された学習塾だ。教室や教科の枠にとらわれることのない総合的な学びを実践し、子どもたちの全面的な成長を支え続けている。その中で、ここ数年注目されているＬＤ（学習障害）やＡＤＨＤ（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症（アスペルガー症候群等）などの発達障害を含む、特別な教育的ニーズを持つ子どもたちに対する理解や支援の不足を背景に設立されたのが、教育サポートセンターＮＩＲＥである。

今回私は、エルムアカデミーの小学部、そしてＮＩＲＥが合同で行うキャンプにボランティアとして参加させていただく機会を得た。とにかく起こる出来事全てを楽しみつくし、遊びつくすこと！　それがこのキャンプでの子どもたちがすべきことだったと言っても過言ではないと思う。ライフジャケットを着る本格的な川遊び、森の中の散策、空き時間を見つけたらドッジボールと、とにかく本当によく遊び、ひとつひとつのプログラムを余すところなく楽しんでいた。

どの道から来たのかな？ あっちだ！ こっちか？ それともそっち？

【1日目】キャンプ場への旅～開放感と不安と共に～

大井町駅に集合。前日夜になって泣きそうになるほど過剰に緊張したが、先生方との最後の意思統一で覚悟も決まった。久しぶりに会った子どもたちは相変わらず元気いっぱい！　顔は覚えていてくれたようで、名前を呼びながら声をかけるとにこにことしながらキャンプで楽しみにしていることを話してくれた。

山梨県丹波山村のキャンプ場へ向かう電車内では人が多いこともあり、なかなかじっと座っていてくれない。どう言えば効果的なのかがわからず戸惑い、なかなか上手に注意することができなかった。

キャンプ場に着くとお弁当のあとすぐに水着に。今日の晩ご飯になる魚のつかみ取りと川遊びへ。川遊びでは開放的な様子が伝わってくる。水は冷たかったが、それぞれ思い思いに川と触れ合っていた。ぼーっと立っていると、突然、6年生の集中攻撃にあう。「こいつ水かけやすいぞ！」と言われ、大人げなく本気で相手をした。

夜にはホームシックが大流行。感染力が非常に強い。プログラムとプログラムの合間のちょっとした時間に家のことを思い出してしまうようだった。寝るときには、添い寝をしても、なかなか眠りにつけない子もいた。

【2日目】自然とのふれあい。仲間とのふれあい。

朝の散歩から1日が始まる。空気が気持ちいい！　子どもたちも相変わらず、走り回ったり遊んだりして楽しそうだった。

午前中は、明日の晩ご飯の食材を盗んだ(!?)怪盗ケロヨンを捕まえるハイキングへ。山を登ったり橋を渡ったり、いろいろな難関をクリアしていく中で、力を合わせる、ということを知っていくのだと感じる。ケロヨンを捕まえるときの生き生きとした顔には、思わずこちらも笑顔になった。

午後は川で様々な競技を行う、水上運動会が開かれた。ＮＩＲＥとエルムアカデミーで合同チームを組み、一緒に戦う。6年生が、時に一緒にふざけたりしながら下級生に指示を与える姿には感嘆するばかり。自分たちも楽しみながら、上手に周りを盛り上げていた。

空き時間に自然と始まるドッジボールが熱い！　謎の技・チャンドンゴンが生まれ（チャンドンゴーン」と叫びながらボールを投げる）、大爆笑だった。こうして一緒に遊びながら、お互いがお互いにとってどんな存在なのかを認識し、仲間になっていくんだな、と感じた。

夜にはＮＩＲＥ花火大会。夜道が暗いことを怖がる子どももいたが、いざ花火が始まれば、歓声を上げながら楽しんでいた。

【3日目】キャンプ最後の夜といえば

それまで別々のテーブルに座っていたが、この日の朝から、エルムアカデミーとＮＩＲＥの子が隣り合って食事をとった。なんだかぎこちない空気だったけれど、共通の話題（ゲームや虫など）を見つけた途端、いきなりマシンガントークでお互いの知識を話し始め、ぐっと仲良くなる姿には、子どもたちのとてつもない力を感じる。

午前中は元日本一長いことで（?）有名なローラーすべり台へ。100段近い階段を上っていく後ろ姿を、息を切らして追いかける。「ゆずちゃん、一緒にすべろー！」と笑顔で言われると、何度でも上っていけるような気がした。笑顔の力は絶大だ。

お昼ごはんは竹を使った本格的な流しそうめん。必死になってそうめんを止める姿が可愛らしかった。

午後は沢登りを体験し、最後の川遊びで大ハッスルした後は、キャンプファイヤーの出し物の準備。この3日間で驚くほど仲良くなった子どもたちは、声を掛け合い、団結して出し物の練習に励んでいた。

キャンプファイヤーでは、6年生が点火した火を囲んで、大きな声で歌い、踊る。火を見つめる目がきらきら輝き、にこにこしながら全身で楽しむ姿には、なんだか胸がじーんとなった。最後には大きな打ち上げ花火をみんなで観賞。明日帰るんだよ、というと、帰れることが嬉しい反面残念な気持ちもあるようで、寂しいな、とポツリと言ったのが印象的だった。

【4日目】キャンプを終えて…おうちへ帰ろう

とうとう最終日。いつもは起床時間になる前に目が覚めてしまう子どもたちも、この日は時間ぎりぎりまでぐっすり眠っていた。

東京に帰る前に、丹波山村の温泉に立ち寄ってキャンプの疲れをゆっくり癒す。例にもれず男風呂からはパンツの落し物。結局持主は、見つかったのか見つからなかったのか。

帰りの電車やバスではほとんどの子が眠ってしまっていた。4日間思いきり遊んだ結果なのかもしれない。かと思うと、電車の窓から見える新幹

■発達障害とは？

発達障害者支援法によると、「発達障害」とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であって、その症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう。

発達障害といっても状態は多様であり、同じ診断名でも、子どもの個性や、発達の状況や年齢、環境などによって目にみえる症状は異なってくる。そのため、一人ひとりの状態を個別に理解することが重要である。

また、発達障害は症状が見えにくいことから周囲の誤解も多い。怠けているように見られたり、学校ではいじめの対象となってしまうこともある。しかし、適切な支援、指導があれば、就労や進学などの社会活動は十分に可能である。詳しくは以下のＨＰを参照していただきたい。

日本発達障害ネットワーク：http://jddnet.jp/
発達障害情報センター：http://www.rehab.go.jp/ddis/a/index.html

線の話で盛り上がっていたり。

大井町駅に到着して、家族、そしてお母さんの姿を見た瞬間の笑顔といったら！　キャンプ中の楽しそうな笑顔とはまた違った種類の笑い方に、やっぱりお母さんには勝てないな、と感じた。バイバイ、と手を振って、お母さんと手を繋いで帰っていくのを見送りながら、キャンプであった楽しかったことを、たくさんたくさん話して、伝えてほしいな、と思った。

子どもたちのポテンシャルの高さ

今回のキャンプで感じたことがいくつかある。一つ目は、子どもたちの持つ、秘めた力だ。

まず初めに驚いたことは、エルムアカデミーの子どもたちとNIREの子どもたちの関係のなめらかさだ。NIREの子どもたちは、どうしても気持ちの切り替えが苦手である。今やるべきことにすぐに集中することができないことが多い。エルムアカデミーの子どもたちは、みんなの前で発表するときになかなか発表する態勢になれなかったNIREの友だちを、とても巧みな方法で気持ちを切り替えさせてあげていた。その鮮やかさには、感嘆するばかりだった。

次に、子どもたちが変わっていこうとする力だ。中塚先生は、「キャンプには子どもたちが成長するための要素がたくさんつまっている」とおっしゃっていたが、本当にその通りだった。普段個別指導が中心であるNIREの子どもたちは、仲間と一緒に生活したり遊んだりする中で、少しずつ変わっていった。

顔合わせのときには、騒いだりなかなか集中して話を聞くことができなかったある男の子は、キャンプ中のイベントでは発表を提案したり、そのための練習を促したり、中心になって引っ張り、イベントでもよく盛り上げていた。初めは勢いだけのところもあったのだが、徐々にあの子はどこ？　と友だちのことを気にしたりすることが増え、リーダーとして力を発揮していた。（いろいろやりすぎるところはあったが…）もともとムードメーカーで、リーダーになる素質はあったと思うが、ここまでしっかりやり遂げるとは思わなかった。

みんなで滑るとスピードも楽しさも倍増！　さあもう1回

また、1日目の夜キャンプ場で新型インフルエンザのごとく（中塚先生談）流行したホームシックの第一感染者だった子も、翌朝ふと「三泊四日頑張ってみる…」と言い、思わず拍手してしまった。彼の中で、何がどのようにきっかけになったのかはわからない。その後はひどくぐずることもなく、楽しそうにプログラムをこなす姿に、胸をなで下ろすと共に不思議な気持ちになった。

中塚先生は、キャンプが終わると、それまで先生の名前を呼びながら教室に入ってきていた子どもたちが、友だちの名前を呼びながら入ってくるようになるともおっしゃっていた。キャンプ中にも、「○○くんと友だちになったよ」とにこにこしながら報告してきてくれたり、2人で手を繋いで歩いていたり…。いつの間にか、そしてあっという間に距離を縮めている子どもたちの姿に、共通の経験を通して子どもたちの中で、仲間、友だちという存在が大きくなっていくのだということを強く感じた。

人間関係における体当たりの必要性

二つ目は、先生方と子どもたちの関係を見ていて感じたことだ。「悪口は言わない。暴力はしない」という約束事に関しては必ず毅然とした態度で注意しながらも、先生、と呼ばせることもなければ敬語を使わせることもない。積極的に子どもたちの間に入っていき、話しかけ、触れ合い、同じ視点で物事を見て同じように楽しむ。その中で

意識がいろいろなところに分散してしまう子どもたちの名前を呼び、言葉をかけて集中を促す。

私は初めのうち、どの程度の距離感を保つかということばかりを考え、子どもとの間に必要以上に壁をつくっていたように思う。一歩引いた受け答えになってしまったり、後ろから見ているばかりで戸惑ってしまうことが多かった。先生方の接し方を間近で見ていて、距離感は確かに必要なものだが、なかなか掴めないならばとりあえず子どもに体当たりで接してみることも大事なのだと思った。

例えばある子がこだわっていることがあれば、何故気になるのか詳しく聞いてみたり、自分も同じように興味を持ってみたり、その子の視点まで目線を下げてそれを見てみたりする。すると、この人なら聞いてくれそうだと感じるのか、子どもたちが自分からそのことについて、自分なりに説明しようとしてくれる。

様々なボランティアを通して子どもたちと接する中で、子どもにとってそれが魅力的なものであれば、惹かれた気持ちを大切にしてあげたいし、そう感じた気持ちをずっと持っていてほしいと思っていた。ただそう思っていても、なかなか実践することができなかったところで、その指標となるものを目の当たりにすることができ、とても勉強になった。

食べるのが先か取るのが先か。流しそうめんは戦いでした

キャンプと子どもたち キャンプと自分

三つ目は、子どもたちと向き合うことで、自分自身とも向き合うことができたことだ。

三泊四日を過ごす中で一番幸せだった時間は、子どもたちのいきいきとした表情を見る瞬間だった。目が合うと変な顔をして、思わず噴き出すと満足そうな顔をする。「セット！」と言うと、はんにゃのずくだんずんぶんぐんゲームをやり始める。ゆずちゃーんと呼びながら、捕ってきた虫を見せてくれる。（虫が苦手な私には少々辛いものがあったが）楽しかったことを一生懸命説明しようとしてくれる。ひとつひとつの表情がきらきらしていた。自分がこのきらきらのきっかけになれていたら、それは本当に嬉しいことだな、と感じた。

ふと、自分が医者を目指した原点を見つけたような気がした。誰かが思いっきり笑顔になれる瞬間を、いつでも何度でもつくってあげたい。それが、誰かのためになれる仕事をしたい、と思った最初の理由だった。医者という職業に就くことになる将来、こんなにも誰かの笑顔をつくりたい、増やしたい、と願った気持ちを忘れないでいたい。

参加する前夜には、不安にかられて涙が出てくるほど緊張した。しかし、今キャンプのことを思い出してみると、子どもたちの笑顔しか浮かんでこない。名前を覚えるのが苦手だという子が、最後の最後にゆずちゃんと呼んでくれたことが忘れられないし、またね、と言いながら手を振る姿が焼き付いている。

子どもたちが進む方向はそれぞれ違っても、進んでいる事実に変わりはないという当たり前のことが当たり前に存在していた空間は、とても心地よくあたたかいものだった。この三泊四日で得たたくさんの想いと言葉を自分に還元し、更に大きな人間になっていきたい。

＊教育サポートセンターNIREの詳細については巻末の各種団体紹介（P161）をご覧ください。

取材・撮影

東京女子医科大学2年
藤井　ゆず

医学部に入って2年、未来図が曖昧なままであることに不安を抱きつつ、とりあえず前進しようともがいています。と言うととてもかっこいい人のようですが、実際は毎日テニスばかりしています。東方神起が好きすぎて、韓国への留学を意識し始めた今日この頃です。